「宝石ではなく、黒鉄（こくてつ）という金属なんだ。恐ろしいほど硬くて加工ができない。これは運良く見つけた、小さいかけらなんだ。王子の妻となるものに贈るしきたりなんだよ」

人魚は自分の胸元に揺れる、小さな黒いかけらをまじまじと見ました。硬い金属。それは〝二人の愛は壊れない〟という素敵な意味にも思えましたが、そのぬらりと光る黒が、王家に嫁ぐということの重大さを物語っているように見えました。

でも人魚は気にしませんでした。そんなこと……そう、本当にそんなことなのです。この、しあわせに比べれば。

王子様の指が、そっと人魚の涙のあとをぬぐいました。そうして二人は、王様と大臣があきれ顔になるほど長い時間見つめ合ったあと、この世でいちばんあたたかい口づけを交わしました。

人魚のしあわせな物語は、こうして始ったのです。

青の城

王子様は王様に、お城を海のとなりに移してもらえるように頼みました。王様は強く反対しました。海のとなりになんて建てたら、敵が攻めてきたとき、あっという間に落とされてしまうでしょう。でも王子様はねばりました。今あるお城からだと、海は遠いのです。何度も何度も頼み込む王子様に、ついに王様は根負けして、離宮ならばと言って許してくれました。

王子様は荘厳で煌(きら)びやかで重い雰囲気の、今のお城があまり好きではありませんでした。なので自分の小さいお城はさっぱりとした造りにするよう言いました。そして光がたくさん差し込むように、窓をたくさん作らせました。

頼まれた大工たちは、夫婦が長い時間離ればなれになっているのはおかしいと、すごい速さでお城を建ててくれました。

でき上がった小さなお城は、王子様の願いを全部叶えてくれました。

複雑な模様はありませんが、色々な白色が混ざった石の床。

調度品はごてごてしていなくて、質素な、でも洗練された形をしたもの。

少しでも明るくと、格子をできるだけ使わないで作られた窓。しかもそれはありとあらゆる壁に。

王子様の部屋にいたっては、一つの壁がすべて硝子でできていました。そこからは、海がよく見えました。その硝子の向こうは広い露台になっていて、海にそのまま行ける階段がありました。

人魚のいる場所からも、王子様の部屋はよく見えました。

王子様はいつも海に行けるわけではありませんでしたが、王子様と人魚はお互いの姿を見るだけで、とても安心ました。

異国の歌

人魚は街の人気者になっていました。この世の誰よりも美しくて、生まれたての子どもよりきれいな心をしているのですから、あたりまえです。それになんと言っても、あの歌声。街の人はもっとたくさんの歌を聞きたくて、こぞって人魚に歌を教えました。

こどもたちは学校で覚えたばかりの、季節の移ろいをうたった歌を。召使いたちは流行りの歌を。初老の紳士は古い恋慕の歌を。人魚のための歌を作る人もいました。

人魚は毎日毎日たくさんの歌を覚えました。うたうことがとても楽しかったので、覚えきれないなんてことはありませんでした。でも、ふと口ずさむのは

王子様が教えてくれた異国の歌でした。

そういえば異国の歌で少し不思議なことがありました。

王子様には分からないのに、人魚にはうたわれている言葉の意味がわかったのです。王子様は人魚に言葉の意味を尋ねました。もちろん人魚は教えようとしましたが、できませんでした。王子様に伝わる言葉で説明できなかったのです。なぜなら人魚には異国の歌の言葉も、王子様が話す言葉も、同じように聞こえたのですから。

その話を聞いた王様は不思議に思って、魔女に聞きました。すると魔女はこう答えました。

「人魚はすべての海を行く、旅人のようなものだ。世界中の言葉を聞いているうちに、そうなったのだろう」

その答えに王様は納得しました。でも王子様も人魚も、もともと気にしていませんでした。たとえ言葉の意味はわからなくても、人魚のうたう歌は、それだけで心地良いものなのですから。

花祭りと花の雨

人魚が王子様と結婚した次の次の春。簡単に街に行くことのできない人魚のために、街の人は花祭りを海でやることにしました。花祭りとは新芽が芽吹き、春の花が咲いたことを祝うお祭りです。

お祭りと言っても、盛大なものではなく、つぼみのたくさんついた花を家に飾り、大きな葉の形をした焼き菓子を食べるという、こぢんまりとしたものです。

結婚した次の春は、王子様と王様と魔女が花を抱えて、海にやってきて、小さな机に乳白色の厚手の布を掛けて、そこでみんなで焼き菓子を食べました。それを見た街の人が、次の花祭りはみんなで海でやろうと考えたのです。

街の人はつぼみのついた花と、麻の布でくるんだ焼き菓子を籐のかごに入れて海へ行きました。でも、もともと花祭りには大きな催し物はありません。花祭りを海でやろうと思いついたのに、結局砂浜に大きな布を広げて、家族や恋人や友達、仲のいい人たちと焼き菓子を食べながらおしゃべりするだけになってしまいました。

でも人魚は喜びました。王子様も感動しました。ただ人が集まっているだけでしたが、人魚も一緒に、という気持ちをとても嬉しく思いました。

その場にいた魔女は、自分が抱えた花束と集まった人たちを交互に見たあと、なにかぽつりとつぶやきました。よく聞き取れなかった人魚が、聞き返すと、魔女はにやりと笑いました。とても意地悪そうな笑顔ですが、これはなにか面白いことを思いついたときの〝楽しそうな〟笑顔です。

「さあ、わからないね。……うまくいくかな」

と、意味のわからないことだけ言って、それ以上なにも教えてくれませんでした。

その次の花祭り。また街の人が海に集まってきてくれました。ただこの前よりも、若い男女の姿が目立ちます。魔女は言いました。

「花祭りの日に、一輪の花と一緒に愛の告白をすると、思いが通じるんだとさ。……おまえたちの劇的な愛の物語にあやかって、だよ」

人魚と王子様は顔を見合わせたあと、吹き出しました。ただの小さないたずら。でも人魚と王子様は魔女のやさしさに気づきました。きっと魔女は、もっとたくさん人が集まれば、人魚と王子様がもっと喜ぶと思ったのでしょう。

「すべてお見通し」という笑いが気にくわないのか、魔女はふんっと鼻をならして二人に背を向けました。でも人魚は、その耳が真っ赤になっているのを見逃しませんでした。

恥ずかしくてしょうがないのか、魔女は早口で呪文を唱えました。そしてその両手から、結婚式のときのような花の雨を、大量に砂浜に降らせました。

若者たちの恋は、ほとんどがうまくいったそうです。

ただ〝花の雨が降る中で愛の告白をするとうまくいくらしい〟というウわさになってしまったので、魔女はそれからずっと、花祭りの日に花の雨を降らさなければならなくなってしまいました。

足

波打ち際で人魚は子どもたちと遊んでいました。遊びといっても、決まりごとなんてない、ただ走りまわるだけの、子どもにはよくある、なんてことない遊びでした。でもそのなんてことない遊びは、勉強なんかよりもずっと面白いのです。

広い砂浜を縦横無尽に走りまわる子どもたちを見て、人魚はほほ笑ましい気持ちになるとともに、少し心が痛みました。

「どうかした？」

となりにいた王子様は、人魚の微妙な表情の変化に気づいたようでした。人魚は言おうかどうか迷いましたが、なぜか王子様には嘘がすぐばれてしまうの

で、正直に言うことにしました。
「私、足がほしいわ」
人魚の言葉に、王子様は目を丸くしました。まさか人魚がそんなことを望むなんて、考えてもみなかったのでしょう。
「どうして？　君の足は人間の足よりも、とてもきれいなのに」
人魚の鱗は、キラキラとした桃色と青色が不思議に混ざり合った、きれいな色をしていました。人間の足なんかよりも、ずっとずっときれいです。
「だって、足があれば、あの子たちと一緒に砂浜を駆けられるわ」
人魚は砂に手をついて、王子様に詰め寄りました。
「砂浜も、森も、街も、お城も。全部自分で行けるようになるのよ。……今のこの足では、なにもできないわ」
人魚は自分の鱗のついた足を寂しそうに見つめました。その視線の先に、王

子様の手が伸びてきて、人魚の鱗を愛おしそうになでました。
「私は、君のこの足がとても好きだよ。でも、それでもと言うのなら、方法はある」
人魚の明るい顔が、ぱっと上を向きました。絶対に叶わないと思っていたのに。
「確か〝姿を変える魔法〟があったはずだ。私にはできないが、森の魔女なら知っているんじゃないかな」
王子様は魔女に会いに行きました。王子様は魔女がすぐに願いを叶えてくれるだろうと思っていましたが、魔女は話を聞いたあと、腕組みをして難しい顔をしてしまいました。
「確かに〝姿を変える魔法〟はある。だが、それはあの子の願いを、完璧に叶

えてくれるものではない」
王子様は魔女にどういう意味か、と尋ねました。でも魔女は、皮肉をこめたような、苦い笑顔をするだけでした。
「魔女は嘘をつけないんだ。その代わり、一度でも〝言わない〟と思ったら、なにがあっても絶対に答えないよ」
魔女は、人魚には自分で説明すると言うと、王子様を追い返してしまいました。

次の日の夜、魔女が海にやってきました。となりに立った魔女を、人魚は期待のまなざしで見つめました。いつものように、ささっと呪文を唱えてくれるものだと人魚は思っていましたが、魔女はそのまま人魚と向かい合うように腰を下ろしました。無表情な顔は、まるで感情のすべてを忘れてしまったかのようです。
人魚は首をかしげました。
「座ってする魔法なの？」
でも魔女は人魚の問いには答えませんでした。
「お前に足を与えることはできる。が、私はしたくない」
驚いて、なにか言おうとした人魚を止めて、魔女は続けました。
「姿を変える魔法にはね、弊害（へいがい）があるんだよ」
人魚は耳慣れない言葉に眉根を寄せました。
「姿を変えるとき、まるで体中を剣で串刺しにされたような激痛が走るんだ。その痛みで死んでしまうものもいる」
人魚は安心したようなため息をつきました。
「あら、そんなことなの。足が手に入るなら、どんな痛みにだって耐えられる

わ」

人魚の頬は、興奮で赤くなっていました。だってもうすぐで、王子様と同じ姿になれるのですから。そんな人魚を見て、魔女が一瞬、苦い顔をしました。

「そしてもう一つ……」

魔女はそこで言葉を切りました。でも声を出すために吸った息を、そのまま吐き出してしまいました。うつむいてしまったので、いったいどんな顔をしているのか、人魚には見えませんでした。

あまりに長い時間だまっているので、人魚が魔女の顔をのぞきこもうとしたとき、魔女が顔を上げました。そこには悲しみでも、苦しみでも、ましてや喜びでもない、感情の見えない顔が張り付いていました。

「声を失うんだよ」

耳に入ってきた言葉に、人魚は固まりました。そんな人魚を見て、魔女はなぐさめるわけでもなく、抱きしめるわけでもなく、ただ黙って、無神経なまでの無表情を向けていました。

――声。

「……そ、んな」

うわずった声がやっと出ました。無意識に下に落ちた視線が揺れました。

足がほしい。

大地を走るってどういうことなのか、王子様が住む離宮がどんななのか、花にとまる蝶々を見てみたい、街を歩いて買い物をしてみたい、魔女の森の草や木々に触れてみたい。

でも、声を失ってしまう。

明るい歌も、暗い歌も、ゆっくりな歌も、速い歌も、なにもかもうたえなくなる。

王子様が教えてくれた、王子様が好きだと言った、あの、異国の歌も。
混乱しすぎて涙も出てきませんでした。魔女はただ黙って、下を向いてあらわになった、人魚のうなじを見つめていました。

月がどんどん昇っていき、ちょうど二人の真上に来たころ、人魚がやっと口を開きました。
「私」
砂についた手が震えています。
「足は、いらないわ」
「そう……。その方がいい」
人魚のうつむいた顔の下に、水滴がぽたぽたといくつか落ちました。くぐもった泣き声は、潮騒に全部飲み込まれていきました。

人魚の息子

人魚は目覚めました。人魚の目が覚めたことに気づいたイソギンチャクは、その身をゆすって人魚の体を起こしてくれました。
そのまま水を蹴って海面から顔を出すと、あたりは朝もやに包まれていました。まだ陽も昇っていません。
人魚はすべるように泳ぎ、いつもの波打ち際まで行きました。でも砂浜に人が集まるまでまだ時間があります。しょうがないので、砂浜の端から端まで泳ぐことにしました。
少し沖に戻って、いつもいる砂浜を遠くから見てみました。
砂浜の砂はとても白いので、大きな弧を描く湾は逆さにした三日月に見えま

した。その三日月の左の先に、王子様の小さなお城が見えます。今はまだ朝もやに包まれていて、お城ごと眠っているようでした。

人魚はお城とは反対の三日月の先を目指して泳ぎました。

そこにはそびえたつ崖があるのですが、人魚は崖の上に行ったことがないので、その高い崖を見上げても怖いと思いませんでした。崖の下の海はとても深くて、人魚でさえ底につくまでにとても時間がかかります。そして、そこにはとても複雑な海流がありました。人魚には楽しい遊び場です。

人魚が崖を目指して泳いでいると、女の人の声が聞こえました。小さくてよく聞こえませんが、確かになにかうたっています。子守唄のようです。

人魚はそうっと近づいてみました。近づくにつれて浮かび上がる影は、ゆったりと左右に揺れていました。

「……ふぅ」

ため息と同時に、子守唄がやみました。人魚は思い切って声をかけてみました。

「その歌はなんという歌なの？」

「あら、誰かしら？」

女の人の影が、人魚のいる方に近づいてきました。ほんとうに近くに来てやっと、女の人がはっきりと見えました。女の人は赤ん坊を抱いていて、手首に杖をぶら下げていました。

人魚はすぐそこにいるのに、女の人は人魚の方を見ていませんでした。

「ごめんなさい。どこにいるのか教えてもらっていいかしら」

そこで初めて、人魚は女の人の目が見えないことに気づきました。人魚は急いで波打ち際に上がり、「こちらです。波打ち際に座っています」と、もう一度声をかけました。人魚の声の場所を正確にとらえた女の人は、人魚がいる方

向にほほ笑みかけました。目の色は光のない空色をしていました。
「あなたは、もしかして人魚姫かしら？」
このころになると人魚は〝人魚姫〟とか〝お姫様〟と呼ばれるようになっていました。人魚はうなずきましたが、すぐに「いけない」と思い、「そうです」と声に出して答えました。
「さっきの歌は子守唄？　よかったら教えてもらえないかしら？」
「まあ。歌姫に教えるなんて。そんなたいそうな歌ではないのよ？」
そう言いながらも、人魚のとなりに腰かけてくれました。王子様もそうですが、ここの人は海で服が濡れるのを、そんなに気にしないようです。
女の人は自分の腕の中で眠る赤ん坊を見つめて、少し揺らしました。
「この子もちゃんと寝付いていないし、もう一度うたいましょうか」
女の人は赤ん坊を揺らしながら、またさっきと同じ歌をうたいだしました。

声を伸ばすところが少ないので、まるで物語を語っているような歌でした。起こさないように静かにうたうその声を、人魚は目をつむって聞いていました。
歌は始まったときと同じように、弱くさりげなく終わりました。
ふと途絶えた子守唄を不満に思ったのか、赤ん坊がぐずりだしてしまいました。
「ああ、いやだわ。この子一度ぐずると長いのよ」
「ごめんなさい。私がいるからかもしれないわ。子どもは気配に聡(さと)いから」
「そうなのかしら……。ああ、はいはい、よしよし」
すっと息を吸って、もう一度うたいだしたその声に、人魚は思わず自分の声を重ねていました。何節か音が重なったあとは、人魚の声だけが砂浜に響きました。
もやの晴れてきた砂浜に人魚の儚い声が響きます。

二回うたったところで、人魚は歌をとめました。
「……やっぱり上手ね。ほら、こんなに簡単に寝てしまったわ」
人魚が腕の中をのぞきこむと赤ん坊がぐっすりと寝ていました。緩んだ手を見て、人魚の頬も自然と緩みました。
「……かわいい？」
ふと、女の人が人魚に話しかけました。
「ええ、とても」
人魚は愛しさのあふれる手つきで、眠る赤ん坊の頬をなでました。産毛が生えた、とても柔らかい頬でした。
「でもあなたの方が、より〝かわいい〟と思っているんじゃない？」
女の人はうなずきましたが、空色の目は翳（かげ）っていました。
「この世界の誰よりも、この子が愛しいわ。この子の手や声も、私を愛してい

ると言ってくれる。でもね」
女の人はため息にならない息を、短く吐き出しました。話している間に空色の目はどんどん翳っていきました。まるで黒色です。
「お姫様。愛する人とずっと一緒にいつづけるのは、本当に難しいわ」
そう言って、女の人は不自然なくらいきれいに笑いました。人魚はその笑顔に、ぞわりとした、いやなものを感じました。
人魚がなにも言えないでいるうちに、女の人は立ち上がって、静かに帰っていきました。よろよろと揺れる後姿を見ながら、人魚は女の人の言葉をずっと思い返していました。
それから数日、人魚の気持ちは晴れませんでした。ずっとあの女の人の笑顔が消えないのです。

複雑な思いで、砂浜で駆け回る親子の姿を見ていたら、ふと後ろから声をかけられました。

「子どもがほしい？」

王子様でした。王子様の声は不思議でした。どんなに暗い気持ちでも、その声を聞けば、すぐ心が温かくなります。

人魚はほほ笑んで、首を横に振りました。

子どもがほしくないというのは嘘でした。でも、人魚と王子様の間に、子どもは絶対にできないのです。それは、虫と花の仲がどんなによくても、その二つの間に命が生まれないのと、同じ理由です。

お互い口に出して確認することはありませんでしたが、二人ともその事実には、だいぶ前から気づいていました。

こうなると、王家の血筋を途絶えさせないための方法は、一つしかありません。でも王子様は絶対にそうしようとしませんでした。

王子様は、人魚さえいればいいと、本気で思っていました。人魚もまた、王子様だけいればいいと思っていました。この考え方がまちがっていることを、二人はよくわかっていました。

王子様は短く「そう」とだけ言い、なにごともなかったかのように、人魚の横に座って、他愛もない話をしだしました。

楽しく話しているうちに、人魚はあの親子のことを忘れてしまました。王子様と自分のこれからのことも、深く考えないようになっていました。

それからまた数日が過ぎました。太陽が真上から少しかたむいたころ、王子様と人魚はいつものように、笑って話していました。

ふと、王子様の笑い声が止みました。人魚が首をかしげると、王子様の眉

間に、ぐっと皺(しわ)が寄りました。人魚が王子様の視線の先をたどって振り返ると、砂浜の先の崖を見ていました。そして人魚も、眉根を寄せました。

崖の上には、何日か前に会った、あの女の人がいました。片腕で赤ん坊を抱き、杖をつきながら、崖の先へ向かって歩いていました。杖が崖の向こうの空白つくと、女の人は止まりました。

そしてそのまま、杖を崖の向こうに捨てて、しゃがみ込みました。

王子様の眉間の皺が広がり、目が大きく見開らかれました。

「いけない！」

いきなり真後ろで大きな声があがったので、人魚は驚きました。でもその声で、人魚はやっと理解しました。

あの女の人は、海へ、落ちるつもりなのです。

王子様が立ち上がり、近くにいた兵士と一緒になって、走り出しました。人

魚も大急ぎで海へ飛び込みました。

しゃがんだ女の人は、足に縄をつないでいました。縄の反対側には煉瓦(れんが)をつないで。

片方に赤ん坊、もう片方には杖を持っていたのですから、縄と煉瓦は前もって崖に準備していたのでしょう。人魚は、海面を強く蹴りながら、なぜもっと早くに気づかなかったのかと、後悔しました。毎日海にいるのに、と。

でも、そんなことよりも、今はただ、一刻も速く、崖の下へ——。

人魚は海流も、潮満ち引きの動きも無視して、水の壁を突き破るように泳ぎました。

砂浜の四分の三あたりに来たとき、女の人が、空中に足を踏み出しました。

——いけない、だめよ！

人魚は海に潜って、もっと速く、もっと速くと念じながら、足を動かしまし

た。

海になにか落ちる音がしたあと、崖の下の海が白く泡立ちました。泡から、女の人が落ちていきます。その下には、複雑に絡み合った海流があります。その海流に捕まってしまったら、たとえ人魚でも助けるのは困難です。

人魚は一度、女の人の真上に移動すると、身体を直角に曲げて、水のかたまりを一気に蹴りました。

――間に合って。

人魚は強く願いました。

――お願いよ。

このまま行くと、人魚が女の人を捕まえるのと、女の人が海流に飲まれるのがほぼ同時になります。人魚は腱(けん)がちぎれそうになるほど、せいいっぱい腕を遠くに伸ばしました。

ふと、女の人が人魚を見上げました。見えるはずのないその目で、確かに人魚を見つめました。

そして女の人は、またあの笑顔で笑いました。

「助けなければ」と警鐘が鳴る頭のすみで、人魚が小さく驚いていると、女の人はもっと驚くことをしました。

今まで胸に強く抱いていた赤ん坊を手放したのです。放された赤ん坊は、浮き袋でも付けられているのか、沈むことなく、ゆっくりと人魚めがけて浮上してきました。

伸ばした手に、赤ん坊が、掛かりました。今すぐにでも引き上げなければ危険です。でも、女の人は、もうすぐそこなのです。

人魚は、二度瞬きをする間に、たくさん考えました。きっとそれ以上の時間はありません。

――ああ、いや。
――いやよ。
――……あぁ。
人魚は赤ん坊の口と鼻をふさいで胸に強く抱き、これ以上ない勢いで、水を蹴りました。
――上をめざして。
人魚は唇を噛んで、ちらりと下を見ました。女の人はまだ笑っていましたが、うねる海流に捕まると、その笑顔はあっという間に濃紺の底に飲み込まれていってしまいました。
でも人魚には、海に溶けた涙が、見えた気がしました。
人魚は海面に飛び出すと同時に、赤ん坊を確認しました。赤ん坊は青白い顔をしていましたが、一瞬置いたあと、すごい勢いで泣き出しました。人魚はそ

の狂ったような泣き声に、ほっと息をついて、赤ん坊を抱きしめました。
崖の上から、人魚を呼ぶ声が聞こえます。人魚が見上げると、王子様が心配そうな顔をして、海をのぞきこんでいました。
人魚は王子様に、半泣きの笑顔を返しました。

赤ん坊を陸にいる王子様に預けたあと、人魚は崖の下の海へ大急ぎで向かいました。間に合うとは思っていませんでしたが、あのまま水底に、女の人を置いてけぼりにしておくのは、なんだかとてもいやでした。
人魚は海流をかき分けて進み、やっと水底に着きました。女の人も静かにそこにいました。浮かび上がろうとしているその体を、煉瓦が水底につなぎ止めていました。
顔はもう笑っていませんでしたし、涙も流していませんでした。

人魚は彼女の青白い顔に、そっとふれました。そして、彼女の赤ん坊にそうしたように、やさしくその頬をなでました。

手のひらで頬を包んだあと、人魚は彼女の足についた縄を、その体を傷つけてしまわないようにやさしくほどきました。そして、冷たくなった亡きがらを抱きしめながら、砂浜まで引っ張っていきました。

人魚と王子様は、救った赤ん坊に〝アーリュ〟という名前を付け、自分たちの子どもとして育てることにしました。もちろん、いつものように王様は反対しましたが、二人ともおかまいなしでした。

王様も大臣たちも、人魚と王子様ががんこで辛抱強いのはよくわかっていたので、何十回と小言を言った後、しょうがないと言って許してくれました。

女の人の墓標は、王子様の小さなお城の庭の奥に建てました。

そこからなら、人魚の子守歌がよく聞こえるでしょう。

収穫祭

秋になり、大地が穀物の金色でいっぱいになってきました。もうすぐ収穫祭のです。

収穫祭は花祭りよりも大きなお祭りです。

森を抜けた先に広がる、金色の畑にみんなで集まって、いっせいにその穂を刈り取り、はだかになったその畑で、みんなで踊って歌って、飲んで食べて、遊び回るのです。

この日だけはどんなにいたずらをしても、怒られることはありません。だから子どもたちは、収穫祭が大好きでした。

人魚も収穫祭は大好きでしたが、海から長い時間離れていると、なぜか落ち

着かなくなるので、夜になる前には海に帰してもらっていました。夜になるともっと盛り上がると聞いていたので、人魚はとても残念でした。

みんな準備に追われているのでしょう。ここ数日、砂浜を訪れる人の数は、いつもよりもまばらでした。

「母さん！」

人魚の背中に、いきなり突進してきたのは、人魚の息子、アーリュでした。本人は抱きついたつもりでしょうが。

あの悲しい事件からだいぶ時が過ぎ、息子はやんちゃな少年に育っていました。大臣によると、お城を抜け出しては、よく街に遊びに行っているようです。

人魚と王子様は、アーリュに全てを話していました。でもアーリュには小さ

いときに喪(うしな)った親のことなど、覚えていませんでしたし、人魚と王子様のことを本当の親だと、心から思っていました。

人魚は背中に抱きつく自分の息子に〝ぜんぶお見通しよ〟というような笑みを向けました。

「抜け出してきたのね？」

「まさか。ちゃんと言づてを残してきたよ」

ちっとも悪びれないその態度に、人魚はあきれましたが、同時に、会いに来てくれたことを嬉しく思いました。

そのすぐあとで、足音がもうひとつ聞こえてきました。人魚とアーリュは笑って振り向きました。

「先客がいるね」

きっと王子様も抜け出してきたにちがいありません。してやったりという二

人の笑みを見ると、示し合わせてきたということも考えられます。

人魚はあきれるのをやめて、ただ笑って親子の時間を楽しむことにしました。でも二人の楽しそうな笑顔には、もうひとつの理由が隠されていました。

からりとよく晴れた日、大人も子ども待ちに待った収穫祭の日がやってきました。街の方から聞こえてくる騒がしさに、人魚の心も躍りました。

真昼になる少し前、お城から結婚式のときと同じ、輿と台座のついた馬車がやってきました。ゆっくり近づいてくる馬車が、はっきり見えたとき、人魚は目を丸くしました。

いつもなら輿がついているところに、輿はついていませんでした。かわりに、大きな大きな硝子のうつわがついています。大人が二人か三人入っても余るくらいです。そのうつわには、水が張ってありました。

馬車の両隣にはアーリュと王子様が、得意げな顔をして立っていました。
「これなら長い時間、水と離れないでいられるだろう」
「父さん、考えたのは僕だ」
どうだと言わんばかりに胸を張る王子様に、アーリュがすかさず言葉を挟みました。
「だが、私が職人を捜したんだぞ？」
「でもまちがえて深く作らせるところだったじゃないか。あれじゃあ母さんが泳ぎっぱなしになってしまうよ」
王子様が言葉を詰まらせました。その姿に、今度はアーリュが腕を組んで胸を張り、勝ち誇った表情を向けました。
やりこめられている王子様の顔がおかしくて、人魚が吹き出しました。横に控えている兵士たちも、笑いをこらえています。

王子様はいたたまれなくなって、人魚をうつわに入るよう、早く早くとうながしました。
もちろん、硝子のうつわの中は快適で、人魚は初めて、真夜中の収穫祭を見ることができたのでした。